



TITLE:

東洋史談話會講演概要

AUTHOR(S):

CITATION:

東洋史談話會講演概要. 東洋史研究 1938, 4(2): 181-185

ISSUE DATE:

1938-12-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145629>

RIGHT:

東洋史談話會講演概要

尼格尼敦考

石濱純太郎

元朝祕史卷一に蒙古の先世を列叙せる中に也客你敦と云ふがあり、之を蒙古源流卷三に録する所と對比すると尼格尼敦に相當する。那珂通世博士は成吉思汗實錄に注して、「也客你敦、譯すれば大眼、蒙古源流には尼格尼敦、譯すれば獨眼、下の都蛙鑛豁兒と混れたるに似たり」と云はれてゐる。也客が譌つて尼格に爲つたのは言語文字の上からも證明されると思ふ。獨眼を意味するなれば尼根尼敦と古くはあつたと思はれるが、今尼格とあるのは也客から訛つたからだらう。これその一。也客と尼格の蒙古字體は極めてよく似てゐる。殊に無圈點の古體であつたなら尙更である。又祕史蒙文の語頭の也が多く伊音となる事は余が嘗て論じた所であるが（東亞研究第六卷第八號元朝祕史蒙文札記）、それならば尙よく誤り易いわけである。是れその二である。

尼格尼敦が誤りである事は回教徒文獻からも證せられる。ドーソンの蒙古史に成吉思汗系譜が註第三として挿入されてゐる。この系譜は「拉施特並に高貴系譜に據る」と注されてゐる。余は所據の兩書を参照し得ないのであるが、ドーソンの系譜によると正しく Yēca Nidoun と出てゐる。祕史の也客你敦と合する。今余が據つて引いたドーソンは一八二四年巴里刊の初版本である。一八三四年のハーグ・アムステルダム再版本は見るを得ないので分らないが、一八五二年アムステルダム三版本では此れが Nigūe-Nidoun となつてゐる。考ふるに三版本系譜では蒙古源流の異名は括弧を以て之を附添してゐるのであるから、このニゲニドゥンもエカニドンに附してあつた原稿本から印刷に附した際に誤つて元のエカニドゥンを脱落してニゲニドゥンを其位地に入れてしまつたものに相違ない。従つて回教徒文獻は元朝祕史と同じく也客你敦であるのだ。田中萃一郎博士のドーソン譯本は明治四十二年富山房本、

昭和八年三田史學會本、昭和十二年岩波文庫本、共に「也客儻敦 [N'igee-N'idoun]」としてあつて原文と譯語と一致せず、讀者をして迷はしむるものがある。田中博士の譯本はドーソン一八五二年本を底本とするものであるから尼格尼敦として原文に一致せしむべきものである。

蒙古源流の尼格尼敦は誤りであるが、源流の原本は誤つてゐなかつたのではないだらうか。固りシュミットの譯注本、ボボフの蒙古文學講本、などの蒙古原文は皆 N'igee-N'idoun に作つてあるが、この底本既に誤つてゐたんでなからうか。アルタン・トプチは薩囊徹辰が據る所の七史の一であると余は信ずるものであるが、これには也客你敦であつて、尼格尼敦ではない。余はガルザン・ゴムボエフ校刊本を見ないが、ボズドネエフ蒙古文學講本所收によつた。是れその一證。ジグ・メ・ナム・カの蒙古佛教史は蒙古源流に依據する所多きは著者自らが記す所であるが、これにも Yele-N'idoun となつてゐる。これはフート校刊本によつた。是れその二證。この二證を以てすると、源流原本は必ずや也客你敦、源流漢譯の例によれば伊克尼敦であつ

たらう。それが文字の類似の爲めに下文の額の中に一眼ある多幹索和爾に牽かれて尼格尼敦と誤り讀まれ、終に現行源流の如くなつたものと思ふ。

晋の南渡と招魂葬議

宮川 尚志

——支那佛教興起の事情の一考察——

東洋史上、古代・中世の分岐點をなすと考へらるべき永嘉の喪亂に於て、横死した死者を、安全な地へ避難した血縁の者が埋葬するのに、遺骸を獲る能はず、止むなく魂を招きこれを墓に藏めるといふ「招魂葬」の儀禮が江の南北、身分の貴賤をとはず、一般的に行はれたが、東晋元帝の時、朝廷の儒官の間にこの儀禮の當否が、會々東海王越妃裴氏が亡夫を廣陵にて招魂葬せんとした事件を動機として、問題化され、招魂葬議大多數は招魂葬が禮典に見えざる委巷の俗なりとして禁止を主張し、禮は時代に因り改むべく、孝子の情を達せしめよと辯論した少數者の意見を壓倒し、裴氏の招魂葬を最後とし禁斷し犯す者は禮法に依らんと定めた。禁止論者は聖人の制を述べ、墓は形を藏め、廟は神を安んずるといふ原則を亂し、神を墓に埋める

の非を責めるのであるが、始源に溯り考へれば、祖先を墓に葬り子孫に對する福祉を祈る古代支那の家族的宗教こそ、後來漢帝國の政治理念となつて社會を維持した儒教の根柢をなし、それに於て保證せられ漢族の傳統的信仰を形成してゐたものである。亡親を埋葬することは無上命令である。廟制の形式等こそ儒者の空論で漢代訓詁學者はかゝる煩瑣の禮式に拘泥し、本來の儒教の姿を忘れ、人心の形而上的要求はために儒を去つて莊老・神仙思想に傾き、後漢末三國の社會的變動はこの勢を助長し遂に五胡の衝擊により支那古代儒教國家はこゝに壊滅した。こゝに禮典通りの埋葬を營む能はざる不幸なる、例外的なるべき場合は今や一般的となり、漢代的社會紐帶から投げだされたる、情、即ち古來の民族信仰の保持者たる人間は、形骸のみの禮典を無視し、内心の至高の道德命令により招魂葬を營んだ。漸くにしてこの混亂せる社會の秩序回復のため體制を整へつゝあつた東晉及び五胡諸國も矢張儒教を採用せざるを得ず、特に東晉初儒家の熱心な儒學振興の運動は第一着手に禮典になき招魂葬を禁じた。儒教はこゝに、嘗て自己を育成した古代信仰を擲つこと

により、禮律並重の法家的儒教に化した。現實の國家の内に今や生きる途を失つた古代信仰は現實を離れた彼岸の世界に於て安住の地を見出ださねばならぬ。老莊清談も超現實の地を憧るゝものであるが、今やかゝる知的觀照的態度を捨て現前に展開する未曾有の事態に直面し、宗教的實踐を以てこの厭ふべき世を解脱しなければならぬ。般若空觀の眞義は眞劍に究明されてきた。佛教はこゝに本來非支那的なもの乍ら今や根柢に於て支那人の心を捉へた支那佛教となつた。當時父祖の埋葬を了らざる者には任官を許さず、かつ招魂葬を禁じてゐたから、かくて朝廷から閉め出され、經濟的にも社會的にもこれと對立する豪族群の存在は佛教教團に幸ひした。古代帝國に於ける宗教政治の調和一致の原則は破れ、天子と貴族對立の中世社會に於て佛教の弘通を見た。

唐宋時代に於ける福建の開發に就いて

北山康夫

福建開發の歴史については市村、桑原兩博士和田清氏青山定雄氏の研究があるが夫等は重に福建の開發さ

るゝまでの歴史であるか、或は政治的文化的に觀察したものであるから、私はこゝに福建が劃期的なる開發をした時代に於けるこの地の經濟的觀察を試みたい。

背後に高峻なる仙霞嶺山脈を負ひ、前は海に面し加ふるにその内部には山岳重疊する福建の地は、その南方にある廣東地方よりも寧ろその開發が遅れ、長く化外の地として取殘されてゐたが、安祿山の大亂に續く北支の戰亂を避くる難民の進出するところとなり、唐末より五代を経て宋に至る間に急激に開發され全く支那化するゝに至つたのであつた。

福建の開發は舊唐書所載の天寶元載の人口と元豐九域志に見ゆる北宋元豐初年のそれとを比較して見るとき最も明瞭となるが、その急激なる人口増加は多く他地方からの避難民によるものであらうが、然らばその間に於て福建省は如何にして開拓されたであらうか。

私はその一つとしてこゝに灌漑設備をとり擧げて見たい。即ちこの地方の海岸では潮流を防ぐために隄・塘・埭を設け、又内部地帯では河水を堰きとめ或は之を圳によつて導いて陂或は湖を作るのである。かゝる陂と湖は錢塘江以南に於てのみ見る獨特のものであるが、

その地形が甚だしく起伏に富み、河水が急流をなして洄れ易きがために發達したものである。而して對岸の臺灣に顯著なる埤圳は實に福建より移住した閩族がこれをその地に於て應用したものに外ならない。又かゝる灌漑設備が唐末から宋にかけて多く營まれてゐることはこの地開發の過程を如實に物語るものであり、支那のその他の地方に於ても見るが如く、強靱なる生活力をもつ漢人が孜孜としてこれらの灌漑設備を施すことによつて荒蕪地を美田と化したのであつた。

最後に注意すべきことは民間有力者又は自治體の活動である。即ち福建開發工作に於て單に上述の灌漑設備に止まらず、橋梁・築城・道路開設等にめざましき進出を見るのである。福建の開發が顯著となつたのは時恰も支那に於て近世社會の成立しつゝあつた時代である。唐の均田制が崩壞して後は自作農の多くは沒落して權勢家の下に隸屬したため、國家は從來の如く自由に之を役し得ず、多くの公共的土木事業は放棄するゝに至つたが、こゝに國家に代つて多くの小作農をその傘下にもつ民間有力者によつて、或はその指導によつて自治體の活動となり、かゝる多くの事業が遂行せ

らるゝに至つたのである。かく観するとき福建開發の歴史は又近世社會の一世相を反映するものといはなければならぬ。

北魏藝術の盛衰

水野清一

晋末の混亂につぐ五胡の騷擾時代は漢以來のあらゆる秩序を破壊した。藝術の様式といふものもさういふ秩序の一形式であるからにはやはり崩壊を見た。そしてこれが新しい自由な立場を提供し、そのところへ勢よく佛教文化、そして佛教藝術が流入して來た。三百年代から四百年代、やうやく政治的な秩序が確立する、そしてその中心が北族の拓跋氏であり、邊境の大同であつた。潑刺たる自由の精神とともに淳樸な生活力にみちてゐた。軍國的獨裁君主は戰爭と討伐によつて國家の統一を完成するとともに各地から人力と財力とを國都に集中した。そしてその力によつて國都の經營とか佛寺の造營とか多大の土木事業が起つた。この地盤の上に雄渾な雲岡様式が成立を見た。それは在來の傳統の上にうち立てられたものであるけれども、それか

らは非常に自由な、全然新しいといつてもいいやうな様式であつた。しかし、國家の整備、社會秩序の回復とともに漢代の傳統が強く浮び上つて來た、北族にとつていへば漢化といふことである。その下にできたのが龍門様式である。洛陽の經營、それはあらゆる點において漢代への復歸が主要な目標になつてゐる。

史觀と史體

丹羽正義

(史林一月號發表)

王玄策時代の印度情勢	立花憲二
桃源瑞仙の史記抄を読む	大島利一
明代田賦銀令の一面	堀井一雄
章學誠の史論	内藤戊申
漢晋に於ける時代の展開	宇都宮清吉
高勾麗の古墳に就いて	梅原末治
(以上、近日發表の豫定)	

× × × ×